



進路部長かく語りき

松国進路だより

第1号 平成30年4月27日発行



進路行事（4・5月）：進路ガイダンス 4/10 2・3年次 4/16 1年次
4/23 進路希望調査 全年次 小論文模試 3年次 専門学校ガイダンス
5/1 スタディサポート1・2年次 河合塾全統マーク模試



君はTVショッピングに耐えうるか？

さて、**新一年生**は新制度入試の一期生である。いろいろと今までにないことを要求される学年になる。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」からなる学力の三要素を測られることになる。今までの大学入試は知識（文学史・単語力など）・技能（読解力・作文力など）を求められていたが、それらを基にしてより高度な力を求められる。

調査書・推薦書・志願理由書なども具体的な記述が求められる。従来なら「野球部員として熱心に活動した」という表現が「野球部の正捕手として公式戦全試合に出場した。特に県秋季大会準決勝では、逆転の危機に強肩を生かし、盗塁を阻止して決勝進出に貢献した。温和だが責任感の強い人柄から部員からの人望も厚く、チームの要である」というような記述が求められる。

こう聞いて、「ああ、助かった。早く産んでくれた両親に感謝！」と胸をなでおろしている**二年生**諸君よ。甘い！入試は急変するわけではない。少しずつ変化は始まっているのだ。各大学のアドミッションポリシーなど大学の求める人物像は細分化していく傾向にある。同じ経済学部であるからといって、A大とB大では生徒に要求する資質などが微妙に違ってくるという

ことなのだ。

このようなことは今までならAOや推薦入試に必要なことだったが、一般入試でも要求されてくる。調査書の所見は担任が書いてくれるのんびりしてられない。君たちの一挙一動を担当は見ているわけではない。そんなことをしたら授業もできないし、家にも帰れない、何よりストーカー規制法に引っかかること間違いなしだ。

さらに**二年生**！翌年から入試が変わるということは、浪人するリスクが途轍もなく高くなるということだ。

さて、そこでTVショッピングである。自分自身をしっかり認識し、売れる商品に仕上げていかなければならない。

学修計画書や志望理由書も選抜の材料として重視されるから、自身と志願校をしっかりと研究し認識する必要がある。

彼を知り己を知れば百戦殆うからず 孫子

コミュニケーションの上手下手

トマス・ウッドローウイルソン（アメリカの第二十八代大統領）は、歴代の大統領の中でもっとも演説がうまかったといわれているが、あると



き、こんなことを言った、と伝えられている。

『二時間の講演なら、いますぐにでも始められるが、三〇分の話だと、そうはいかない、二時間くらい用意の時間がほしい。三分間のスピーチなら、すくなくとも一晩は準備にかかる』

君たちは文章を書くときに、400字だと安心し、1200字と言われるとげんなりするのではないか？しかし、ウイルソンの言葉通り、実は短い文章ほどきちんと書くのは難しい。

これは話すときでも同じことだ。ただ話すのではなく、「自分の考えをどう話せるか」が問われることになる。相手にきちんと伝えるためには長さも考えなければならぬだろう。限られた字数で自分の思いを過不足なく、必要にして十分な内容をどう盛り込むか。

A O・推薦入試では面接が課される。想定される質問の答えは準備していくだろうが、想定外の質問が出た時にどう対応するか。会話（コミュニケーション）の基礎は頭の中での作文ではないだろうか。

では、どうやって作文力を高めるか？お勧めするのは、新聞一面コラム（天声人語など）の筆写である。小学校時代に漢字ドリルをやっただろうが、一文字目は灰色で書かれた文字をなぞったと思う。コラムの筆写は、文章におけるなぞりなのである。整った文章を写すことで、きちんとした文章が書けるようになる。素振りを繰り返すことにより、実際にボールを打つ時に、正しいフォー

ムで、タイミングで打つことができるようになるということだ。

さらに、普段自分では絶対に使わない言葉を書くことにより、語彙が増える。未知の言葉をきちんと調べるといふ条件は付くし、私見であり、極論ではあるが、これさえ毎日やっていたら現代文の勉強は不要であると思う。

君たちは、日常において他人によりかかったコミュニケーションをとっていないだろうか？以前授業の始まりに「先生、プリント」と言った生徒がいた。私は「プリント？どうしたいんだ？丸めて口の中に入れてほしいのか？」と答えた。当然、「前の時間に公欠でもらっていないので、配布したプリントを下さい」が正しい。同時進行で話し言葉に気を使うことも必要である。

や文法も重要なことだが、作品の時代背景やあらすじを把握しておくことが大切だ。

例えば、源氏の「薄雲」の明石の上の母娘の別れの場面でも、そんなにつらい思いをして、なぜ養女に出すのか？という疑問は、母の身分が低いと幸福な結婚ができない時代であったという時代背景を理解していることが必要である。

さらに源氏のあらすじを理解していれば、ああ、あの場面かと理解でき、わからない単語が出てきても類推できる。

しかし、これだけの分量を読むには相当な時間を要するだろう。そこで、「あさきゆめみし」である。大和さんがこの連載を始めた時、第一部くらいまでやるつもりかなと私は思った。しかし、結果としては54帖すべて描ききった。まさに偉業である。漫画であれば高校生が気分転換に読めるではないか

我々の時代には英語で出題される文章はサマセット・モームの「要約する」と(The Summing Up)が多かったのだ、日本語でもよいから読んでおけと言われた。今はそういう作品はあるのだろうか。

「君がどんなに遠い夢を見ても、君自身が可能性を信じる限り、それは手の届くところにある。」

(ヘルマン・ヘッセ)

ヘルマン・ヘッセ：ドイツの作家、ノーベル賞受賞。代表作「車輪の下」教科書で「少年の日の思い出」を読んだ人も多いのでは。



本の小箱
「あさきゆめみし」
大和和紀著

大学受験に頻出する古典作品は以下のようなものである。

源氏物語・徒然草

宇治拾遺物語・枕草子

鴨長明(方丈記・無名抄・十訓抄)・大鏡

本居宣長(玉勝間等)

更級日記・伊勢物語

古今著聞集・平家物語

今昔物語集

古典の対策として単語